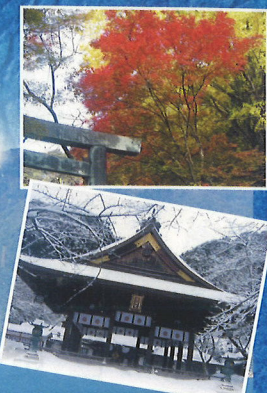


難関突破
と
恋の宮

かねがさきぐる

金崎宮

吹付る 風は乾賀の宝ふね
まうけて帰る かねがさきかな
(乾賀風景ハッソ謀・金ヶ崎帰帆)



天筒山(てつづやま)から見た金ヶ崎
現在の鉄道の所は海でした。

信長の妹お市の方ゆかりの 難関突破守・勝守

(小豆袋守)

信長の妹お市の方は、浅井氏裏切りの危機を知らせるため両方を紐で結んだ袋に小豆を入れ陣中に届けたという。



儲けて帰る

金崎宮は恋の宮 恋愛成就 恋まもり

「花換祭」で若い男女が桜の小枝を交換する事によって思いを伝えあったといわれています。



金が咲き守

ミニタペストリーセット

金運を招く



福娘
カ
香
ちゃん

花換まつりには福娘が神様の華をお分かちします。

幸福祈願

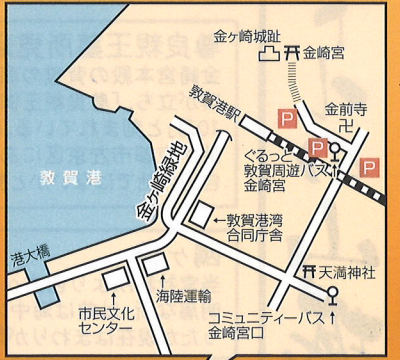
恋みくじ

カレン
『福娘 香恋ちゃん』
ステッカー守付き

御祭神

尊良親王 (後醍醐天皇一の宮)
恒良親王 (後醍醐天皇皇太子)

金ヶ崎城跡は、延元元年(1336)に尊良、恒良両親王を奉じて下向した新田義貞が足利軍と戦った古戦場で、金崎宮には両親王が祀られています。また、元龜元年(1570)、織田信長の越前朝倉攻めの折、窮地を救った豊臣秀吉の殿(しんがり)の地として知られ、国の史跡に指定されています。



春

花換祭

〈はなかえまつり〉
期間中神社で授与される桜の小枝に我が思いを託し「花換えましょう」と唱えてその小枝を交換し、福を授かるうとする美しく麗しい神事。

4月上旬

秋

御船遊管絃祭

〈おふなあそび〉
延元元年10月20日尊良親王、恒良親王以下の将士が管絃の船を海に浮かべて紅葉を愛で月を賞したという故事に倣い行なわれる。

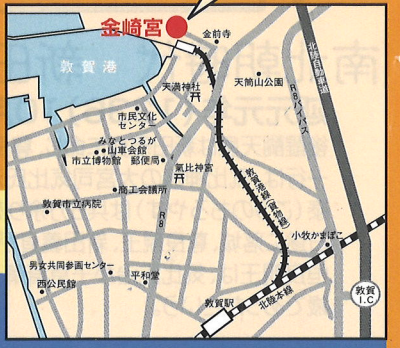
10月20日



福井県敦賀市金ヶ崎町1番地4 電話(0770)22-0938

北陸自動車道敦賀インターチェンジより車で10分 JR敦賀駅より「ぐるっと敦賀周遊バス 金崎宮」下車徒歩5分

金崎宮ホームページ <http://kanegasakigu.jp/>



金ヶ崎城跡

金ヶ崎の退き口(金ヶ崎の戦い)

戦国の世 金ヶ崎に信長・秀吉・家康が勢揃い

元龜元年(1570)4月

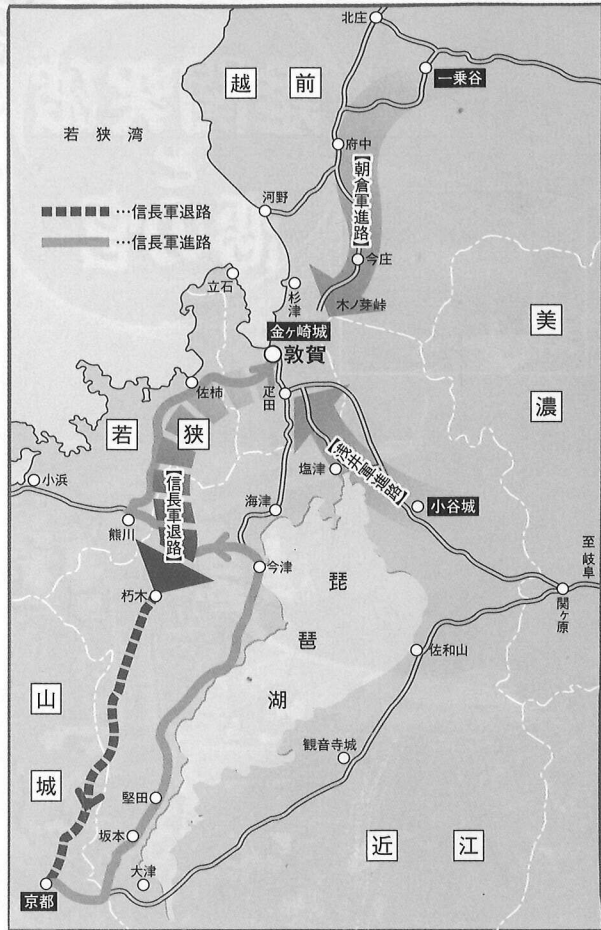
織田信長は越前の朝倉義景討伐の軍をおこし、敦賀に進軍、天筒山城、金ヶ崎城を落し、越前に攻め入ろうとした時、近江浅井氏裏切りの報、信長は朝倉氏と浅井氏との間に挟まれ窮地に陥り急遽総退却、この時金ヶ崎城に残り殿(しんがり=軍隊を引き上げる際、最後尾にあって追って来る敵を防ぐこと)を務めこの難関を救ったのが木下藤吉郎(豊臣秀吉)で、その活躍にて無事帰京することが出来たと伝えられる。

金ヶ崎は天下取りへのターニングポイント

この戦いの2ヶ月後、信長は近江姉川の合戦で浅井・朝倉連合軍を破り、天正元年(1573)8月には夫々を滅ぼす。また秀吉もその後信長の信任を受け天下取りの道をすすみ、家康は秀吉の殿(しんがり)を助けて、後に謝意を受けるなど金ヶ崎での戦いは、信長・秀吉・家康それぞれの武将にとっても天下取りへのターニングポイントになったところといえる。

金ヶ崎の退き口(かねがさきののきぐち)

金ヶ崎の戦いは秀吉・家康にとって大きな武功の一つとされるが、秀吉が無事、殿(しんがり)を務めたため後に「秀吉の退き口」などといわれ、撤退の見本とも称される。またこの時ともに戦ったとされる前田利家や秀吉の家来達も秀吉の出世とともに功名を挙げてゆく。その武将らにとっても「金ヶ崎の退き口」は大きな転換点であったのだろう。



「織田信長軍・朝倉攻め進路及び退路図」

元龜元年4月20日・京を発、22日熊川宿・23日佐柿に入る。敦賀・妙頭寺に陣を構え、25日天筒山城を落す・26日金ヶ崎城開城。28日浅井長政の裏切り総退却・朽木谷を越え、30日京へ入る。

海拔86メートルの山城

絹掛の松(きぬかけのまつ)

月見御殿より眼下を望むと小島のような岬が見える、ここを絹掛ノ崎という。落城の際、桓良親王が人目を避けるため、御衣を巖上の松の枝に掛けて脱出されたという。現在、その松も枯れてない。

月見御殿

鷗ヶ崎より階段を北東に登って行くと頂上近くに金ヶ崎古城跡の碑があり、このあたり一帯の平地が本丸の跡といわれ、少し登ったところが最高地(海拔86メートル)で月見御殿という。ここからの見晴しはすばらしく、天候がよければ遠く越前海岸まで望むことができる。

尊良親王墓所見込地

金崎宮本殿の背後の高台にある。円筒形の石碑が立ち、「尊良親王御陵墓見込地」「明治9年10月」と刻まれている。親王の墓に指定される地が京都市左京区にあるため、落城時の親王自刃の地ではないかと見られている。

鷗ヶ崎

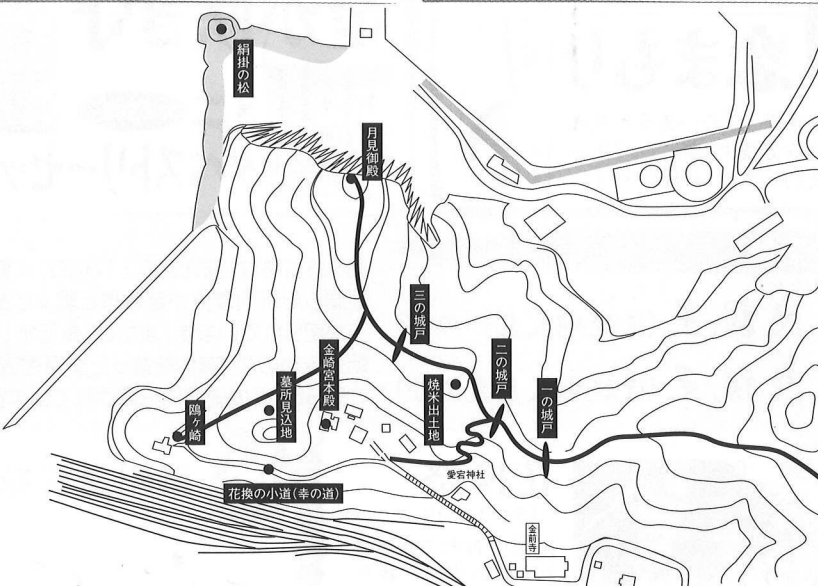
当宮社務所より西方へ250メートル程の風光明媚な所、以前は海中に突き出した尾崎であったが現在はまわりが埋立てられた。

城戸跡(きどあと)

ここには3ヶ所の城戸跡が残っている。月見御殿より南東へ峰つづぎに三の城戸、二の城戸、一の城戸とあり、延元2年の戦いでは二の城戸から三の城戸あたりで激しい戦いが行われたようである。

焼米出土地

付近から清水がわき出ているという「水の手」と呼ぶ平坦地にある。土中から、炭化した米が発見されたという。戦国時代、朝倉勢の兵糧庫があり、織田信長との戦いで焼け落ちた際のものといえる。



南北朝時代 新田義貞、尊良・桓良親王を奉じて敦賀へ

延元元年(1336)10月

後醍醐天皇は新田義貞に命じ、尊良親王、桓良親王を奉じて北陸道に下向せしめた。

一行は、気比神宮の大宮司気比氏治(けひのうじはる)に迎えられその居城、金ヶ崎城に拠られた。しかしここも足利軍の攻めるところとなり、総大将高師泰(こうのもろやす)は兵6万余りを以て陸海より金ヶ崎城を攻撃、延元2年正月、杣山城の瓜生保(うりゅうたもつ)等兵5千余の応援も効を奏せず3月6日遂に落城、尊良親王、新田義貞が嫡子 義頭(よしあき)以下将士300余人が共に亡くなられた。尊良親王御年27歳、義頭18歳であったと伝えられる。桓良親王は、気比氏治が子息斎晴(なりはる)によって脱出されたが、後に捕えられ、延元3年(1338)4月13日毒薬をもらわれて亡くなられた。御年15歳であったという。